



のとも危くええ一折加勢と請んと思ひ六小三が身を援て背門より出せ彼
 此より里人小よりと告駈催しとつり末ぬれと朝夷ぬの武勇よりて彼
 る草賊ホの一箇も送らぬ敷殺されて又彼鐵盾矢藤五も辛くと逃
 るるもの折らるるれが里人達をた依ふ背門よりひ下りあはれて又御内
 人の浅疾なるものぬれをを勅之膏菜を打せたり又草賊ホが亡骸を
 して出さず鮮血の汚穢をあらと洗拭せるとせし程は聊時も程り
 こそ里人ホを還しる件の事の趣を報せんと思ひつ次の間をたまはれ
 ど朝夷ぬと物くらひの最中をのりければ言葉の腰を折らんとひとり彼
 ぬまはりし申斐ふ朝夷ぬのへるも問むとよくゆえり今さうとへ誰か
 も危りける禍鬼を斬くうちも襪れれば御内なる人々の命を預せり
 ゆるむその救びは只痛くは幼きものことひの眼包を推拭ひく
 義秀小ち對ひ絶て久し朝夷ぬ一とふか夫主後の危窮とあはれ
 る恩義の須弥より高くく日る母子三とせこの縁は連る遠
 鹿伏の巨海よりる海深き今よちぬぬと折よくあはれせめてはも
 多別は盗賊と敷拂ひひひの敷たの中る救びの再會にたはゆるれと只
 管稱て己ざりしを義秀の夢ゆむを答はせたり何のわん去歳よりあ
 身の心つりの大くするぬとさう寝ても先ぬてて救何よりもあ身の働
 郷向小危窮と拯んとと里人を駈催せしと現その才覚ありあり寔は武士の
 妻ありと嘆賞されが一二も判五も共は感嘆とせこれのまはるる月の
 友鶴が長兄病著又身まより一襄の事まはるる事真られることまはるる
 幸るよとよこの人かあ人の微りせがいつる事このまはるるよはた趣舎を致
 ると報るを呼て義秀のゆく稱賛をさけるさうなる程よは黄氏時よ

るりす判五の左右をえつてのりつてかそめを孫が亡骸をたれり誘
めとそ身と起せぬ皆齊一うち列立く縁頼より出入とるる。あ庭下
駄一雙の判五のやこれをも朝夷ぬ。先出の我三人の背門より
遠りんとを馳せ引くせむ浅良井も一二も後方小跟て退れけは雨程小
義秀のそが庭のち出て巻石傳ひのちちと樹植は添てつひり。乾淨
房は赴け打抜れる障子の隙より燈火の光幽り彼の持佛のぬわ
るんとどひつち近つけども判五ホのまをて来ぬ義秀その性急なればひとり
縁頼は登りつ障子を飒落哩と推開て進み入らんとする程。どひかけ
また一箇の女僧が嬰兒抱て前向ふ立ち義秀うちらんとて。うち放馬たの母の
圖らるる對面之何の程よりこの乳おのひけんと同せも果む右も爪縋る
敷珠ぬり揚て丁々發矢とうち居て涙は曇る声を戦。別をとりて四
歳雨よと雨れ日小照され。昔の途ありまに旅宿のいづる宴をを
目のる海親とえられの不思議さよ。乳を推せ乳母を親といひ
うめれるうねもの。いづねにぬけぬる。實の母君鞠繪の前より代
折檻の數珠の親所と佛の慈悲智者の千慮の一失あり愚者の一
得るうねむいとは。はるる。取つとあんと亡母君の教訓
むと。腹のまをたの諄言のい。海ありあ。受容てつらくと
あ。年未巡り。國々をめぐり。風声隱もさし。頼く。日
かり又わると。危の曾安。日。を。同。初。房
別。折。を。遣。船。親。鈍。佛。ホ。慶。あ。ひ。そ。あ
養。育。の。恩。義。の。爲。勇。敢。傳。と。の。鎌。倉。の。和。田。殿。の。麻。子
。多。る。君。の。亡。母。君。の。遺。訓。を。と。り。千。金。の。身。を。逃。く。單。身。で。衆

係儘言ふ。うち向ひひひの備の謀の血氣も出せ。そのと書きたるものなり。

 七れのそと。その年。その宿りと投んて。入のその武勇。其山。其平。

 太ホ。山。寨。入。ひ。と。趣。び。て。衆。悪。と。夷。け。ひ。ひ。も。畢。竟。を。折。救。ひ。て。り。る。ゆ。

 女。小。草。受。れ。ば。不。聊。を。甲。斐。あ。ふ。似。れ。初。の。送。り。あ。り。ま。け。れ。ば。仇。快。て。ふ。

 の。類。と。大。勇。あ。め。ら。う。有。右。而。圖。ら。を。環。り。會。ら。二。三。ぬ。一。嫌。嫌。せ。

 れ。て。あ。の。女。兒。と。娶。り。ま。う。その。有。身。を。知。り。た。も。下。野。之。邂逅。と。る。友。達。を。索。

 遭。ん。と。心。づ。く。も。ゆ。り。捨。て。出。あ。ひ。より。罪。人。と。ま。り。あ。り。の。う。も。あ。る。せ。だ。漸。く。

 寛。在。釋。也。も。る。妻。奴。と。な。え。く。と。只。友。人。を。救。え。と。生。死。を。争。ふ。陸。奥。の。戦。

 場。又。赴。け。あ。ひ。より。真。愛。よ。ぬ。堪。ぬ。妻。子。の。想。死。を。せ。め。も。再。度。の。討。つ。も。

 攻。煩。ふ。る。兇。賊。終。任。を。敷。捕。て。鎌。倉。殿。の。お。ん。の。小。四。の。靈。毒。と。は。拂。ひ。言。見。

 冠。者。を。救。ひ。半。と。為。る。恥。辱。と。雪。あ。ら。れ。の。勢。ひ。已。と。の。り。け。ん。勇。士。の。本。意。

 ら。ん。れ。も。彼。地。之。元。仲。ぬ。の。相。伴。ん。と。い。れ。を。鎌。倉。殿。より。い。ま。ぞ。徴。し。て。父。

 義。盛。も。召。入。ま。ぬ。推。し。ま。る。要。事。と。と。袖。振。拂。の。陣。中。より。脱。れ。ま。る。あ。ひ。

 の。光。伸。ぬ。の。他。の。功。と。竊。と。う。と。く。罪。せ。れ。吉。見。冠。者。も。ゆ。る。敵。軍。を。の。身。を。

 禁。錮。せ。れ。之。の。死。咎。め。の。一。條。の。り。の。め。あ。る。と。あ。れ。と。彼。人。と。共。侶。な。

 鎌。倉。入。り。ま。り。あ。り。の。誹。奸。口。と。困。ら。う。と。圖。ら。む。と。彼。人。の。資。を。と。れ。る。も。ま。

 ら。ん。と。志。の。ゆ。り。も。高。け。る。名。と。取。ん。た。の。と。い。ひ。あ。る。後。已。と。際。く。せ。と。その。友。達。

 苦。し。む。の。語。語。の。佛。造。り。て。魂。を。伺。ひ。人。に。使。り。て。あ。の。め。を。我。獨。と。る。歡。解。

 の。親。の。勘。當。票。たり。とも。折。を。伺。ひ。人。に。使。り。て。あ。の。め。を。我。獨。と。る。歡。解。

 る。子。の。道。道。と。も。況。ん。ぬ。心。の。り。て。遠。離。ら。れ。と。い。ひ。あ。る。後。已。と。際。く。せ。と。その。友。達。

 病。も。よ。り。と。茶。々。公。に。疎。れ。る。ひ。と。お。ん。母。君。の。恥。ら。ひ。て。憤。り。ま。堪。が。り。け。ん。あ。ら。う。刃。の。

 休。め。の。死。を。折。え。ん。と。ま。り。任。て。海。館。に。潛。び。出。さ。う。後。々。の。り。云。云。と。仰。



月夜六部



愛宕山
宿家
初到
倉人
録
神交

草花六部

五

特は勁くほのまゝ年々来巡りし靈山冥地の神も護らせぬひけん佛も救は
 れぬけん不思議といふものありあは辱きし就ては自落る涙を禁めぬ本
 尊の由仙を且く拜せしめぬとて公相違がめん身をうらみ言ふは
 定く不咎えしこの嬰児の去歳の秋友鶴が産一女の子を名を田鶴媛と
 するもその餘のゆも巨細くあらわして又使ひし時を殺しぬこれそ
 めくてもありぬべしこの田鶴との悪もをいさぬ公相違のつまぐ物と
 ありまじく直出く告ぐと身を起し折しゆりめんが外面より閑
 障子も不意く顔對しとあはれし腹のゆるゆる休情なき剛意
 見の俗より外視八目飲其基聖と呼びし寛蓮でも親の勝ぬ人の道
 亡母君の教訓とて賢死心よひいとて謙倉へ趣ぬやよ喃々と
 けり返も言葉の露と衣の露玉をうらみし公道人情花も實のあり

心の誠の猛く優く勇し靴繪の尼と名も肩も人柄ええであれん義秀が
 せり免より頭を低れしと措死黙然とてわたりし膝折直しく貌を改め
 せりひらき母刀自れ再會の泣びと述るれいも違もあて某が過失を論
 りて下緯の趣一條とて理りし稱むとて今世よと義秀が
 まで抱をいれんと他人の誰かあはれ只是實母再来の告言と兼せり
 りて背死ぬ死ぬあはれ安くしひひひのちもその小兒が不測は必死を脱
 せりもあはれ身の左右の受留られし奇も現身を護る神も佛も
 求めしとて外ありし親を神られ佛られ言表は昔里を立まるとて別れ
 せりし七の宵より一日としめん身の往方の心おのらぬ時もあるは環も
 あらんとて閑の東のゆも四國九州の浦々まで巡りし旅宿する果敢
 る死夢あはれをさるる面影似る人も遇りし月安くとては程も田藏人

光仲が尚井平より一と死鳥鵲川のほとりまで危殆船と死身は極れる。縛の
 趣如此くると近属奥の陣中あく彼人よ呼んと光仲が太田の社へ赴けし此
 及みたる彼如くもさざざり死とぞありあて定まる。秘の靴を隔てと輝と掻く
 心地のこころひひ死彼光仲が渡迹の口より母の汲引の依まらあれらの奇遇
 のさあしく光仲のつと親友且その親へ樋口二郎兼光とを呼えれ渠が大功
 のさあしく今直毛も恩賞多く還く罪と蒙るの抑甚麻多る政道も又
 義邦の残珪片玉鎌倉君殿の宗族なり且時夏と戦ひ捕らる此度の軍功
 みるあはれ某の鎌倉の少汰をけまを知らざりふたもつゆまをみる。あん身の
 意見その義は稱へり。身の非と飭るふあはれども郷は某が光仲と俱して
 鎌倉へ参りし。あまの名を取んとあ為もあはれむ。親と盾衝くあろもるし。
 彼経任を戦ひ捕らる。あまの義邦の為と鎌倉君殿の為とあせざり死のむをさ
 始終の軍功の惟光仲のうへあり。然れども某彼人々と共々鎌倉君を推参せ人の
 功を擡取ると己が譽を賣るふ似たり。とあひおれれ推辞くゆむ。あまをさるりて
 光仲の不測の罪とあてん。政吏のうへあはれ。あまの所為あはれむ。とあてん。頭とあ
 掉て否れ。あまをさる。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。
 伴んとあはれ。推辞むと参る。と君と重んず。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。
 諸君の恩賞のふ推辞す。と光仲ぬ。譲らん。誰うあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。
 免誰うあはれむ。と礼といふ。死。智者も千慮の一失。愚者も千慮の一
 得。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。
 拍る。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。
 旅。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。
 子。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。あまのあはれむ。

義孝乃の心を苦しめ、おえとて、外面の判五十二、淡良井とて、聚合を
 せり。程をとり、れと、會共侶小進、入りて、中の一、二、揖せ、うら、微笑、た、樹
 と、寄、ま、く、呼、め、う、う、大、儲、の、お、懐、よ、能、く、と、く、で、渡、せ、れ、と、先、の、程、も、阿、三
 と、の、小、説、れ、談、義、の、聽、き、あ、く、誰、と、く、袖、を、濡、さ、ぬ、絶、て、一、人、も、る、を、と、又、飲
 ひ、も、大、く、あ、ぬ、田、鶴、と、の、美、も、あ、り、と、そ、の、依、あ、ん、身、の、懐、は、熟、睡、し、く、あ、り、と、と、
 千、々、の、土、産、と、齎、せ、し、り、と、二、と、の、あ、る、を、幸、生、物、稻、向、ぬ、の、大、喜、大、悅、と、の、見、の
 顔、の、あ、り、け、ん、を、舞、の、腰、を、折、ら、し、と、と、會、共、侶、は、立、在、で、久、う、彼、首、の、お、ぬ、ひ、死
 又、改、め、く、對、面、と、あ、ぬ、へ、り、と、隔、さ、ぬ、辨、は、判、五、も、膝、と、進、め、く、年、末、噂、の、傳、は、る、
 友、鶴、が、実、の、母、也、と、知、る、苗、め、一、宿、あ、り、俗、の、親、の、喜、愛、集、ゆ、く、これ、の、場、ぬ
 縁、ゆ、を、某、則、判、五、も、れ、昔、上、総、は、在、り、程、の、橋、六、と、呼、れ、お、兄、の、家、督、を、嗣
 と、る、後、の、州、異、中、と、路、遠、く、假、名、実、名、同、じ、う、ら、ぬ、が、去、來、く、と、訪、易、か、う、ぬ、を、
 一、二、更、と、お、ん、身、の、斯、も、る、ま、く、う、ら、取、聚、合、れ、昔、と、相、譚、ひ、慰、ほ、勢、は、これ、ま、ぬ、た
 一、二、然、る、と、い、ん、や、田、鶴、媛、が、必、死、を、救、せ、ぬ、ひ、る、お、ん、身、の、則、昔、昔、薩、之、年、末、信、お、る
 宝、珠、山、の、地、藏、尊、の、お、む、の、ん、ぶ、ら、ん、と、お、ぬ、ま、り、は、辱、く、て、彼、首、で、拜、せ、ゆ、ひ、死、
 これ、お、就、て、も、友、鶴、が、け、ん、も、存、命、と、ま、く、彼、孝、行、と、容、止、の、人、も、と、く、は、提、れ、を、
 誇、り、も、て、人、は、彼、女、と、さ、し、二、十、五、百、の、夢、の、迹、覺、て、悔、し、世、間、の、花、も、嵐、月、も、雲、
 盈、れ、の、虧、く、と、知、り、ま、く、悟、り、と、さ、り、思、愛、の、迷、ひ、ま、と、と、い、ひ、ら、け、て、落、る、涙、を、お、
 拭、け、朝、繪、の、尼、も、目、と、あ、む、と、た、く、若、く、頭、を、低、お、ま、す、と、懇、切、る、は、お、ん、
 辭、ま、り、と、摘、め、哀、れ、と、の、限、り、あ、り、取、り、ま、り、八、入、は、信、り、世、渡、の、楫、の、廻、り、
 獨、女、と、碇、楯、の、中、の、親、も、と、ま、り、い、て、あ、く、進、り、せ、り、年、長、て、索、て、本、
 へ、見、の、見、ら、ぬ、も、思、ひ、景、の、一、二、ぬ、一、主、の、子、の、阿、三、の、あ、ま、と、な、り、入、
 信、り、の、あ、ま、り、捨、て、て、外、ま、り、お、宿、所、の、覺、り、と、も、な、ま、け、く、門、邊、へ、過、り、

一、二、更、と、お、ん、身、の、斯、も、る、ま、く、う、ら、取、聚、合、れ、昔、と、相、譚、ひ、慰、ほ、勢、は、これ、ま、ぬ、た
 一、二、然、る、と、い、ん、や、田、鶴、媛、が、必、死、を、救、せ、ぬ、ひ、る、お、ん、身、の、則、昔、昔、薩、之、年、末、信、お、る
 宝、珠、山、の、地、藏、尊、の、お、む、の、ん、ぶ、ら、ん、と、お、ぬ、ま、り、は、辱、く、て、彼、首、で、拜、せ、ゆ、ひ、死、
 これ、お、就、て、も、友、鶴、が、け、ん、も、存、命、と、ま、く、彼、孝、行、と、容、止、の、人、も、と、く、は、提、れ、を、
 誇、り、も、て、人、は、彼、女、と、さ、し、二、十、五、百、の、夢、の、迹、覺、て、悔、し、世、間、の、花、も、嵐、月、も、雲、
 盈、れ、の、虧、く、と、知、り、ま、く、悟、り、と、さ、り、思、愛、の、迷、ひ、ま、と、と、い、ひ、ら、け、て、落、る、涙、を、お、
 拭、け、朝、繪、の、尼、も、目、と、あ、む、と、た、く、若、く、頭、を、低、お、ま、す、と、懇、切、る、は、お、ん、
 辭、ま、り、と、摘、め、哀、れ、と、の、限、り、あ、り、取、り、ま、り、八、入、は、信、り、世、渡、の、楫、の、廻、り、
 獨、女、と、碇、楯、の、中、の、親、も、と、ま、り、い、て、あ、く、進、り、せ、り、年、長、て、索、て、本、
 へ、見、の、見、ら、ぬ、も、思、ひ、景、の、一、二、ぬ、一、主、の、子、の、阿、三、の、あ、ま、と、な、り、入、
 信、り、の、あ、ま、り、捨、て、て、外、ま、り、お、宿、所、の、覺、り、と、も、な、ま、け、く、門、邊、へ、過、り、

るふも中めも判五の額の汗を遠くお拭き。謹で稟さる御説を聞き
 朝東生の道中ゆく。所勞よりとあるも後日と弼り。とせけり
 登くは帰るもせり。とくまう。然るゆん。と忘る。立んと。程。義秀を
 裳と更。置換の蔭を。うら。咳。進。出。常。盛。ま。ち。對。ひ。其。則。義。秀
 る。と。ひ。ひ。る。遠。路。の。説。使。迎。送。の。礼。整。の。失。敬。の。野。人。の。習。俗。こ。ま。づ。用
 捨。を。あ。り。既。説。意。の。趣。の。彼。死。の。承。り。ぬ。不。肖。の。某。期。せ。り。と。君。父。の。死
 兄。平。小。預。と。有。る。死。ま。ま。本。意。を。稱。へ。り。の。ん。や。又。か。伯。兄。を。この。死。使。を。立
 ら。れ。の。緩。葛。倒。は。拭。ふ。不。似。で。い。も。恐。惶。を。以。相。別。れ。り。天。の。一。方。朝。野
 死。を。異。ゆ。て。成。長。り。く。ゆ。べ。父。兄。と。い。く。も。面。忘。れ。く。疑。ふ。死。と。さ。る。彼。恨。利
 迦。羅。の。短。刀。の。け。さ。ま。腰。に。さ。る。と。さ。る。この。名。刀。の。奇。特。ま。よ。り。仇。を。數。回。斬。を
 退。け。る。と。さ。く。の。靈。應。あり。短。く。と。欲。さ。る。と。死。の。九。寸。五。分。の。短。刀。の。り。入。手
 か。ん。と。欲。さ。る。と。死。の。三。尺。許。の。大。刀。と。も。な。れ。り。鎌。倉。の。日。よ。り。大。人。の。亦。内。の。

紛。れ。あ。る。う。も。ゆ。り。も。只。この。名。刀。の。さ。る。と。某。を。衛。育。る。彼。好。母。某。の。是。裏。の
 頭。髻。と。剪。捨。く。灵。山。灵。地。を。巡。礼。し。圖。ら。る。宿。り。後。堂。は。今。遺
 の。渠。も。亦。さ。る。入。正。証。人。る。某。が。さ。り。あ。る。陸。奥。の。陣。中。の。こ
 光。仲。は。相。別。れ。鎌。倉。の。所。り。光。仲。も。義。邦。も。不。測。の。咎。め。を。蒙。り。金。錫
 せ。れ。事。の。趣。け。り。初。め。傳。せ。く。駭。嘆。せ。り。と。い。ふ。一。の。れ。推。察。仕。り。く
 彼。人。々。の。冤。屈。を。釋。ぎ。友。垣。結。び。甲。斐。あ。り。と。某。も。勸。め。ら。れ。某。の。小
 之。へ。近。死。首。途。致。さ。る。と。さ。り。折。り。この。死。使。を。出。船。は。追。風。を。獲。る。が
 如。い。と。歎。く。ゆ。異。説。る。言。の。承。り。せ。り。常。盛。も。亦。歎。ひ。て。さ。る。

當。座。の。美。諾。某。の。面。を。起。さ。飲。ひ。ゆ。れ。これ。小。加。ん。俱。利。迦。羅
 る。某。も。さ。り。證。拠。分。明。さ。る。誰。か。和。殿。さ。る。父。の。子。さ。る。と。い。ふ。死。を。

さまれのみあまの和殿軍功の事にて鎌倉殿より徴させ給へば必ずしも私
 親疎は依りたる事なき君の父の御侍の死に和殿を伴ひ旅されば御書も
 つけよと有とそ夜を犯しとまらんとく準備を成りしといふ義秀一
 謀は及ばざるもかゝる仕度切この曉もうち寛だく体ひぬとすくむ
 といふ廣光も義秀判五二ホは別れ後の情義を述べ義邦より贈らる
 る書状を義秀を遞与しける當下腰越獣六郎と申すは進み出
 義秀は額どうら見覚へたすしけれ某の御内人獣六郎と申すは
 申したとすくむひかり大敷の仰を察し和子と追蒐なり金澤の野
 苛と投られひひか長生しつ甲斐あり又又迎ひおありし稚児時の
 勇力の神さの憑きと申すは僻直あ果しく日本國中名なる
 勇士と申すは彼葉のあまを今宵の昔と語出く笑るべりやいん
 ぬめとす。と真実とす。と義秀微笑し結ひるを稱け。夜
 初更の鐘の音され判五二共侶も義秀が袂を掖し使へ舎見よと
 候。今宵の宿と仕度ありあり端近し南向の別席へといふを常盛
 うちゆぐその議定もあはべ。この曉も相共必歸路を赴くべしと
 時の程も彼葉もあま對面しと申すを同慰めん酒食の管轄と
 くと三郎の家尊の大人より贈りある三種あり獣六郎掖露をせむと
 つけよと腰越獣六郎の外立出く西箇の奴隷を昇りて申すは行童等と
 披し時服一領と申すはこれを縁頬よりと登せ常盛の御書も
 信濃驍の太く遅し三歳駒の金貝磨る鞍置て真紅の厚總披し
 庭門より牽入ける當下腰越獣六郎の義秀より対ひ物云と語ま
 れ義秀は件の時服と申すはうち戴せ東を向く恩と謝し馬と二三受と

道をもくか如しと古人のひけん義秀が鎌倉のりも現その時を得
より死とく答ぬりれるんなりける。

濱相撲禄物

後輯第五十四 小壺海大鱷

却説常盛の義秀と相伴く只管路をりて程は五月廿三日中録倉
近く帰来まけりこれより人を宿所小走らりて先云云と報し義盛
るも飲びて次の日の未明より義秀ホを迎へよと一兩名の家隸は雑色
隸と相副て曹越までを遣し廿四日の己の時なり小三郎殿の父者
罵の騒ぐる常盛義秀二騎相並び今巷路の東る邸へかへる
程小在鎌倉の老仙男女これをえんとて取をりれ門前死市の如く時
くも賑ひたりする程は常盛は且義秀と客房は迎入れさし休りて

堂は其父義盛の對面く岩神の言の趣義秀がうへに
忠一三が義膽判五が老實に至るまゝそのをもせし隨はまゝ
義盛ぬく感悦く躬て礼服と整て呼入れて對面を當下義秀の
膝を進めく額つたる頭を擡別れなりその比は進退姉母が隨意
をひらば稍東西を知りより帰糸の情願のりといふも
まゝ身の賤れは且羞く十八年の月日を歴り終ると今圖らば
顔を拜しなる飲りたる蘇武が匈奴の國とまゝ漢朝に還りし
を此と憶をる氣もあはる義盛は感嘆く適男子は
姉母葉もが和郎を抱きまゝりて想よりまゝりて
くまひれり往方定ふるよりも取て親の年とあつた人
の教道見れば和郎が武勇と行状と世の風声も隠れる且又け



四男の重

三男の重

四男の重

五男の重

六男の重

七男の重

おひる

倉の義也
義兄弟
語取

章六の重

遣して常盛越の岩神より義秀と名づる海老のよう。云々と報知せしむる使
 者程もまぐろの末で朝夷殿のいん御所の山沙汰は依又死之入江三三廣
 光の舊の如く荏柄平太は預け置む。と死下知のひとひまより義盛則
 廣光と名づる客房ゆく酒食を差め更へ又一箇の家録は雑色奴隷と
 され副々廣光は相具して荏柄の宿所へ遣は程は流長も亦人々先んじて
 を歸りける。程は柳營の走卒小壺の濱の死假屋より相州の
 署とて一通とて来りけり。義盛即披たる。小義秀今朝多著のすあり。
 常盛を多く渠はせ小壺の死假屋へ来り。者へ執達件の如し。五月廿四日。
 と書れり。義盛これを常盛及義秀よんせり。先復翰を進し。の躬と
 死使と返さ程は常盛も義秀も猛に衣裳を整へ。各々後者を俱し。
 父は辞し。歩走より小壺へありけり。義盛これを目送り。二郎がけ着て

け將軍來の見参入。このいと速る。吉事のうへの吉事。るん寔は加賀と
 べ加賀とべ。といより。合咲。越路の供は立りける。腰越獸六。初とす。て
 送る酒うち飲り。義秀が吉左右と今くと候りける。時將軍頼家卿の
 色と好酒と嗜も。歌舞蹴鞠の遊具は夜より日。日継はあめり。あつ時を
 富士定柄の山獵より。の足跡り又の。小壺金沢の漁獵。目と消。あめり。
 放逸嗜慾。限りもまければ。この目も北條相模。義時仁四郎忠常比企弥四
 郎。小坂太郎富部五郎毘田八郎。と。野道。死供。小壺の。いん
 の。浦人。細を引。て。高。り。ける。風。波。不。順。の。故。あ。り。け。ん。其。獲。物。の。雜。魚。を
 る。り。く。ん。氣。色。より。の。は。れ。是。遊。捕。の。甲。斐。も。多。く。潜。没。言。白。水。郎。
 仰て石炭明栄螺と捕ま。り。て。せ。せ。て。の。を。し。め。へ。義。時。忠。常。奉。て。浦。人。亦。と
 呼。よ。り。縛。云。と。分。付。果。浦。人。亦。困。果。御。誼。の。ゆ。え。今。の。小。壺。の

漁舟の潜没する白水郎のむねを義時時時とむる故に若と問へば浦人
 さしゆ近属のつらりの洋中まいと大なる鯨の雌雄兩隻のる。はた人食これと
 知ると是れは濱の漁夫浦平と呼ばれしのが鯨は隻足と咬断して忽地命を
 墮せしる浦人怖れ多く没潜をせむと綱引は幸のる死も作の悪心魚の
 所ひるれ浦平が女婿さける浦太郎と呼ぶれ婦翁の仇を復さんとてさる
 る釣と造の網を作てか鯨を捕とせしむるれども釣も綱もひりり
 して浦太郎の故は身上の衰て女房板枝と何如へや給事小とく牛
 なる彼れれのもあもゆらば漁獵の便著と失ふるこの浦一人とて困窮せぬ
 ざり願ふの上の威徳にて鯨を退治しぬるその時を死目前で潜没をも
 仕うえけい免させぬと辭齊一推辞するを頼家達よゆひて昔より
 ありの海は悪魚の栖るとてむをその浦人ホが横さるるたの作りてあを

第五編
 巻の一
 出る
 像并
 姓氏目
 録中
 浦太郎
 と備書
 の名を
 浦三郎
 と同
 編四の
 巻の
 本文
 浦太郎
 とあり
 あり
 あり

わん皆逐はれと敦固めぬ氣色のまをる浦人ホの怖れ迷ひて困
 額と集めり左の右の商量を所詮推辞するとも免させぬと
 ねの圖を引て當るれを牛と鯨と捕とせしめり外はさるると各圖を引
 程は彼浦太郎がまきければとて散動する人食鯨を中浦太郎
 駭憂ひて取る紙籤を傍に投捨するは海す何ゆをこれの喪の龍を
 けの役は駈出さるるれ中もあを細引の人数さるれば要時りとも
 出よとてつらり隊に入れられ各位と格別又この圖をゆひ取し吾侪と
 のぞ陰死ありと勸解と衣皆咄めむを只その身勝手の辨へ喪の龍とも
 看立病とも當役小四唯列てこの圖を當ると譲ると誰う受く見人命を借
 れるれを鯨の和士の仇を討死せよ本意さるれば浦太郎の嘆嘆に
 堪ざらる不稱あはれる鯨の婦翁の仇を討つてもさるれば千尋の

底は潜望入と誰より彼野と殺さぬ忽地よその腹中よ暮れられり疑ひを浦
 平との吾侪との海ありと翁塔が思ふ命と限はるは是過世の業報
 いまれが夫婦同胞うちも揃て命運薄く非命は然を取ることと怨
 おちろ左右神の落涙と押拭へる衆皆あはれなりとも義時忠常御談を
 傳へ催促をくるりければ緯云々と喧えの浦太郎を扁舟に乗して先とや
 澳へおえとく準備も暇も折々傳告の青侍御假屋を走り來り和田
 常盛召ふより朝夷三郎義秀とわくまゆりぬと喧えの浦太郎を頼家も
 あひく義秀欲は不承り常盛共侶あると召し潜望の技は今要時後ふ
 こそとえれ浦太郎といふれその假屋の舟より舟置てその餘のれい且退
 せよとてとれそがの迫習の輩あるゆと云々と相討の朝夷邊と俣程は
 和田新左衛門尉常盛義秀と相具くとちや假屋を走り來り頼家

これと御覽と新左衛門於遠路の使節速に弟をわと參普者心祈り
 現義秀が面魂勇力もさるるを越月力と試みる角舩の勝負は優り
 る誰よりその濱邊ゆく義秀と雌雄を決せん角舩はあつたさるの
 こそと仰されども豫てより義秀の勇力武藝は耳怕るけりけり
 らんといふれりて遠巡とまるとされれば側は侍りる義時これを尻目よけて
 進み對ひく稟をせり義秀の雙の勇士武藝も又煉熟とされり角舩の
 技も長しとておまがわん供の杜依ホは道が敵もあつたさるの
 但し常盛も亦坂東あり二を争ふ勇士るる角舩のりもよく好く
 よれと喧えりあられとの兄弟は立ちあへて争ふと下り角舩は
 しも果は頼家卿うち合はれり領死あひくその一敗を候へり
 があふも義秀は後いなり義時もち對ひく御談を辞ひたりとの

惶恐くゆども角紙の勝負の烈いれに兄弟が弟小勝ゆ人倫の言を
 備其が誘て常盛が勝ゆの長少の礼是より乱れと云ふ塔の閣の基
 この美の聴させあふと憚る氣をもさし論いさげを頼家卿のひてさ
 所理あるふ似これと大九君は侍りけの私親りく辨まぐげのんやまを
 一時の興あり然るを推辞のえうさるゑるを勝肩の言をけし立合せ
 やと焦燥ゆい義時忠常辭を盡しとさるゑる如く懇切さ仰と固辞
 を礼を枉く誑言は後ひあといりて義秀脱る路さるゑるも美服
 あり立あつらんとしけるを頼家要時と弟あさむて父乗替の駿足と假屋
 母より牽出さる指し示しと宣ふ常盛義秀彼とん抑彼駿馬の
 近見比官令廣元が進ませと鮮明月毛と名つけり特小愛するのれされ
 ども福物と牽たりこれを心の橋大り勝肩と名ふと仰まは常盛

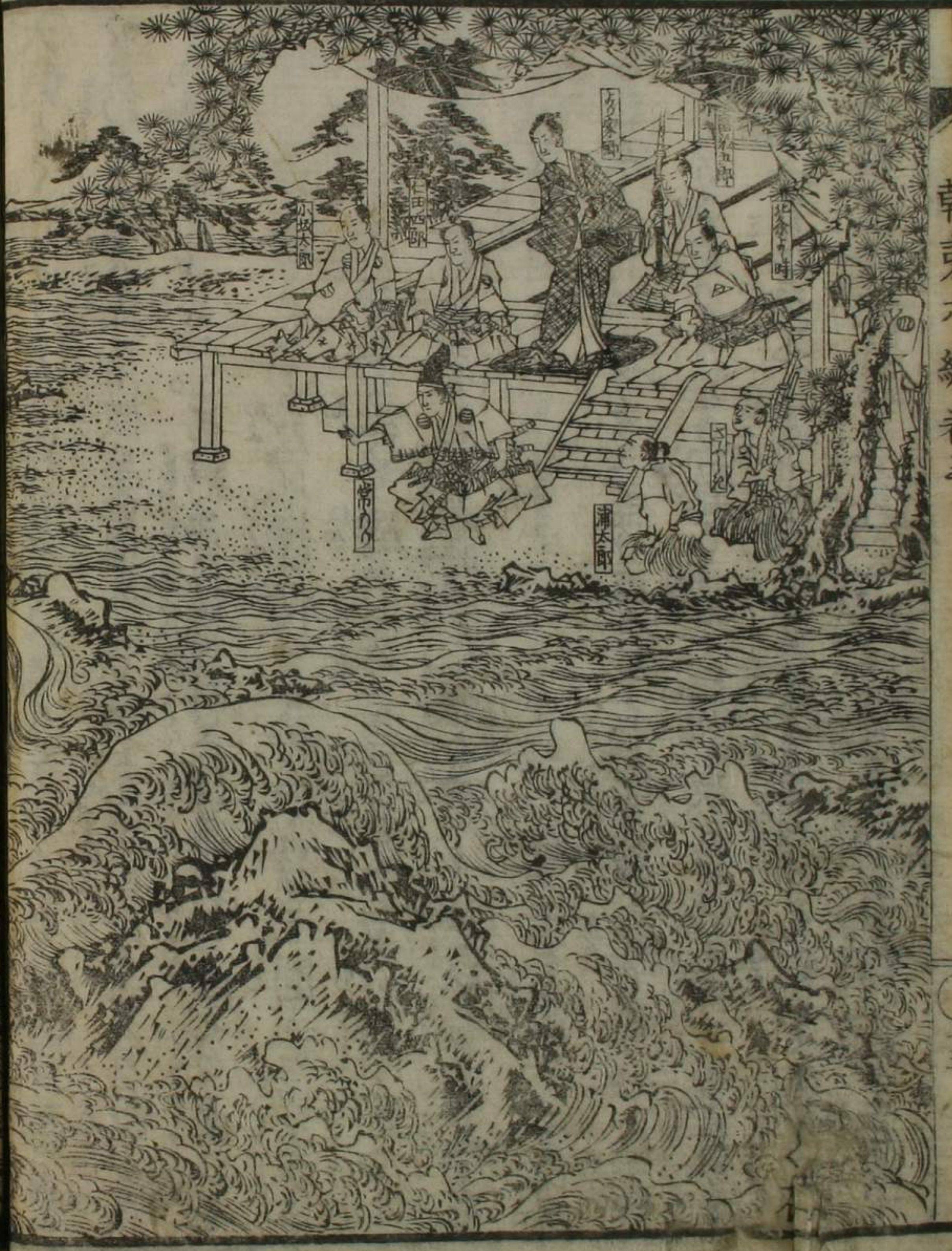
義秀阿とをり小答さるる遠くおん前を退る御假屋の前
 真沙路は立出さる衣裳を脱て砥削松の枝の肉りとも被も数名の雑色
 沙石を集めて俄頃土儀を造り出小坂太郎の仰を稟る行司の役を
 候しけるゆて兄弟東西の立るれ土儀の中に進み入ると呼吸と揃り虚実と廻ひ
 要時盤桓の程もゆも忽地行司が引く團扇と共に齊一引組常盛
 豫てより鮮明月毛と渴望の折もあつたもなりと賜ふとあつた
 月下もあつた只管は勝負を好ま振倒さんと角へども義秀の此も動
 るを吐裏小ゆさるれ今家兄と掻攪て投入の難は所為さるれども然る
 りも面目を赤兄の為にあつた恥まりさるれ初見もさる將軍の
 此目筋ゆく兄を譲るを肩あつた兄のあつた傍煩もさる生涯の環
 瑾さる所詮勝も肩あつた時を程もさるさると思ふ勝肩

好まじ組方腕を振解て反くし又引組を振ほど互の秘術を
 實々踏鳴し方ちる足は大地のわちち減凹まふ接ある半响なり勝
 肩も果あせんとる君臣死酔多てい人名を最手抜手大隅隼人
 阿多隼人野見宿禰蹴速りともこれあつての優へてと且感も且呆
 れて瞬もせ目成りてり當下行司小坂太郎の假屋のかさうち對ひて跪坐死
 けし声高女小既小肉も如く優劣さうと時と根を疲労もさてせいのり
 虎肉と争ふと死に一虎の必傷くとり左も右も勝負のあつて引け
 いへといふ小坂の昔を傳へく常盛と義秀が東西より引きたり且く息吹吻せ
 けりあつては一う為体は頼家御感大なるら當座は勝負するといへ
 ども駿馬の同胞は賜るべければ兄まれ弟まれ望するのれと取れりと仰も果
 常盛大く故馬騒だく馬の尾毛を焚と取り引戻さんとてけと義秀透
 さま馬小拍入れ一中礮とあつては馬の尾頭を引断離く海へ入水と
 馳入り常盛これを追んとする小水戲未孰るをて推つて水小ぬ入
 らむ波打際をゆと抗と返せくと呼れとも義秀の耳もさけ安房の海
 邊は成長りて水戲水馬は自由とぬこれ馬の平頸うち越さ可の波も風も
 物ともせん遙前面の澳中を顕れ出る高岩巖を乗るをとを酒せり君臣
 更ふこれをさく速騎り馬もより彼巖を大坂東道三四十里一里を
 めん状とくゆび負あをりる浩如といふ大死る鰐の波を蹴て義秀が
 乗る馬の後方より走りぬるとをさう馬の忽地骸骨を後足うけく噓
 断きけんそこの潮水鮮血小変て嘸たあま主り共は波の底を論を

ける。必ひひるる形勢。君臣忽地真醒。われよくと叫ぶ。五六十町あり。る。澳のわかれまじり。故は術もまじりけり。是より先。常盛の遠く衣。裳を着る。さへうらゆ。は澳のこも。ち眺め。わたり。件の緯の景迹。い。い。う。駭。憂。ひ。て。義。時。忠。常。ホ。と。高。量。畢。又。浦。人。を。取。合。く。切。く。中。が。亡。骸。ま。り。と。も。船。り。く。撈。ま。り。と。せ。ん。と。く。さ。く。り。そ。う。一。百。程。は。義。我。秀。方。は。波。の。底。を。十。四。五。町。り。や。潜。り。来。り。け。ん。忽。地。波。上。に。浮。き。出。り。と。大。死。る。兩。隻。の。鰐。を。左。右。に。楚。と。抱。絞。て。水。際。へ。瀾。び。着。と。そ。の。依。ま。づ。る。浦。邊。の。物。も。た。件。の。鰐。を。投。出。せ。し。海。内。を。雙。の。大。力。ま。吭。を。扼。ら。れ。を。け。り。鬼。畜。の。等。し。た。巨。鰐。も。れ。も。血。を。吐。く。と。駭。く。僅。に。四。足。を。動。さ。の。と。又。生。べ。く。も。わ。づ。り。し。君。臣。う。ち。ま。り。舌。を。吐。死。駭。嘆。せ。り。と。い。は。れ。る。と。鰐。の。大。死。る。と。一。隻。の。八。尺。む。り。る。と。一。隻。又。も。此。一。舟。を。り。是。を。免。郷。向。は。浦。人。ホ。が。雌。雄。二。隻。の。

大鰐とく。怕る。の。れ。は。疑。ひ。る。と。さ。も。く。と。な。り。は。要。時。の。鳴。も。已。ま。り。け。り。か。ら。わ。り。浦。太。郎。の。假。屋。の。母。と。り。より。進。み。出。跪。坐。た。く。せ。り。と。詠。ま。る。か。う。郷。向。は。上。ヶ。い。と。く。この。鰐。共。の。僕。が。婦。父。浦。平。が。雙。言。敵。へ。年。來。怨。を。復。ん。と。思。は。れ。ら。う。ち。う。ら。及。び。鬱。鬱。憤。々。も。ま。り。ひ。ひ。は。圖。く。む。勇。士。の。を。借。り。夙。志。を。遂。げ。と。を。は。り。願。ひ。只。今。この。惡。魚。を。一。大。刀。刺。し。ぬ。へ。り。と。又。他。の。も。る。く。も。ま。り。と。義。時。時。々。眼。を。瞪。く。見。奴。匹。夫。の。分。際。を。御。所。の。み。目。前。に。憚。り。も。な。り。と。鰐。の。妻。親。の。仇。を。ま。り。と。云。云。と。ま。り。の。刃。の。程。ま。り。ぬ。白。物。ま。り。と。四。能。り。立。ま。り。と。辭。尖。鋭。く。叱。ら。れ。て。浦。太。郎。の。阿。と。な。り。ふ。忘。り。ま。れ。と。立。難。く。は。し。は。額。を。疾。て。り。その。間。ま。り。秀。方。の。手。を。濡。る。を。拭。き。遠。く。衣。裳。を。被。り。義。時。ま。り。ち。對。ひ。て。相。言。ひ。言。ひ。の。浦。太。郎。の。匹。夫。も。婦。父。の。為。不。怨。と。ある。鰐。を。殺。さんと。い。ひ。

こつ不
小壺の
海よ
義秀
雄の
を
捕ま



草言八ノ巻

事年事を厭き志の根らむを今あるは外もんて。下大刀刺を
 冀の便是義夫のあまむ編蓬の中あまかの如記義夫のあま士風
 起ま後々も美談とあべ。鰐の某が捕ませ。肉心賞の請
 多く今此浦太郎刺まを。それを不敬とせられ。そのあま外も某が
 ひらああんの。此よりまうさあう。と辭せり。理を推て亦浦太郎
 對ひ汝が所願を義は稱へ。これをせしひのま。刺さ怨を復よ。といひ
 大刀を貸まは。浦太郎怒び。刃を引拔。登り。わら。偏息。両
 隻の鰐の尻のわりを刺んと。皮半。刃を受ひ。刃尖。口中へ突
 つらぬき。刺苗。當下浦太郎。單衣の袖を。刃の鮮血を。拭ひ
 去り。聲よ納め。義秀。返り。雲時。額をつた。又脚假屋の。ま向
 ひく。額つた。拜り。遠く。舊の処。退死。頼家。これを御覽。ど。願く

常盛義秀。何より近く。刀の。汝達。角触の。段。何を。兄。何
 弟とせん。絶く。甲乙。死の。就中。義秀。水戲。水馬の。衆人。扱れる。ま
 毒龍。ゆも。劣らぬ。兩隻の。鰐。水中。輒く。捕ま。る。り。文学。武
 其。差。あれ。も。彼。唐朝。の。韓。退。之。の。功。徳。伯。仲。夫。死。の。既。不。祿。物。と。と
 牽。し。る。鮮。明。月。毛。の。惡。魚。の。為。不。傷。け。ら。ま。底。の。水。屑。と。り。更。又。座
 右。の。鎧。一。具。と。取。り。入。常。盛。の。近。日。小。駿。馬。を。え。み。賜。と。又。浦。太
 郎。の。漢。夫。が。鰐。を。刺。んと。願。ひ。の。志。神。妙。之。是。より。漁。獲。の。便。著。と。い。は
 小。壺。の。浦。人。安。堵。せ。比。皆。義。秀。の。功。と。あ。ら。ん。鰐。の。翌。日。二。日。の。間。の。死。築。罰
 一。七。家。人。を。母。む。た。音。あ。ら。浦。正。は。仰。ま。一。日。も。そ。西。に。没。んと。ま。れ。け。の
 遊。ひ。の。是。ま。も。義。秀。の。常。盛。共。侶。今。宵。の。且。宿。所。は。退。り。て。翌。日。の。當。中。に
 あり。仕。へ。あ。ら。ぬ。飲。と。可。嗜。は。皆。え。あ。ら。せ。く。黒。草。威。の。鎧。一。櫃。と。賜。馬。

